図工・美術分科会

仲間の表現にふれ
想いを色や形で豊かに表現していく授業

愛知教育大学附属岡崎小学校　　山本　陽介

1　図画工作科で求める子どもの姿

かなしいときに元気が出るようにしたいので，目や口をわらっているようにして，色も明るい色にしたい。かざりをつけたら元気になるお面になると思う。しょうき君はお面をもりあげていてとてもいいと思う。つぎのじゅぎょうでは，かざりともりあげをがんばりたい。
（11月12日　梨咲子の学習記録）

粘土によるお面づくりに取り組んだ梨咲子。元気が出るようなお面にしたいという想いをもち，それを「わらっているように」「明るい色に」と，色や形を工夫することで伝えることができると考えていることがわかる。

このように，わたしたちは，子どもたちが自分の想いをもとに，感性をはたらかせながら想いに合った色や形を求めていくような表現活動をめざしている。ここで言う「感性」とは，視覚や触覚などの感覚をもとに，対象や事象から色や形の美しさ，イメージなどを感じ取るはたらきのことである。そして，その過程において，仲間の表現によさを感じながら，自分の表現を問い直したり，感じたよさを自らの表現に生かすことで，さらに自らの表現を拡げ，想いを色や形で豊かに表現することの喜びを感じていく子どもの姿を願っている。

子どもたちは，心を揺さぶられる対象に出会うと，それに対して抱いた想いを色や形で表現していこうと動き出す。そして，自分の感性をはたらかせて，色や形を駆使し表現に向かっていく。しかし，この表現の過程において，想いと表現とのずれを感じて追求に行き詰まったり，「これでいい」と安易に満足し追求を停滞させてしまうことがある。また，完成のイメージがもてず，自分のめざす表現が本当に具現できているのか悩み，不安になってしまうこともあるだろう。

そうしたとき，自分とは異なった感性による表現にふれるための，かかわり合いの場をもつ。作品を通して互いの表現を見つめることで，その色や形にどのような想いが込められているのかに気づいたり，新たな表現を知り，自分の表現のあり方を問い直していくと考える。また，想いは似ているが，自分とは異なった感性による色や形の表現にふれたり，自分と同じような色や形で表現された作品にはたらいた，異なった感性にふれたりすることで，自分の表現に対するさらなる可能性を見出し，「さらによいものを表現したい」と，追求に向かって動き出していくだろうと考える。お面づくりの過程で，自分の表現にもの足りなさを感じ，もっといい表現はできないかと，自分の表現を見直そうとする子どもの姿があった。

ぼくは，今日の話し合いで，しょうき君のいけんがいいなと思いました。どうしてかというと，色をふやすと元気が出そうだなと思ったからです。ぼくもそうしてみました。みどりをつかったり，青をつかったりしました。これからもじょうずに作れるといいです。　（12月13日　亮汰の学習記録）

亮汰はこれまでの活動のなかで，色を混ぜ合わせて黒っぽい濃い色をつくり，そこから自分の想いに通じる力強さやかっこよさを表現しようとしていた。本単元では，亮汰には，様々な色の組み合わせ方に出会うことによって，単色による表現ではなく，複数の色を組み合わせて表すことのおもしろさに気づかせたいと考えていた。そして，ひとり調べを進めるなかで，自分のお面には元気さが足りないと感じていた亮汰は，かかわり合いを通して仲間の表現にふれ，自分の表現を問い直した結果，色の種類を増やすことで自分の想いをさらに豊かに表現できると考えた。自分にはなかった表現にふれることで，新たな表現を拡げることに向かっていったのである。

こうした造形活動をくり返していくなかで，子どもたちは，互いの見方や考え方，感じ方，想いの違いに目を向け，それらを理解し受け入れることによって，自分の表現を見直したり拡げたりしていけるようになるだろう。そして，仲間とともに自分の想いを豊かに表現することの喜びを感じていけると考える。

２　２年図画工作科単元「ひねってつくろう　元気をくれるジャンボお面」を構想する

(1) 和樹をとらえ，願いをかける

> 今日は学活で図工室のそうじがあったのだけれど，ぼくはちりとりをやっていて，ごみをとっているのに，かずきくんとってといわれました。なので，つかれるけれど，みんなにやってといわれてうれしい気もちになりました。　（６月２９日　和樹の生活日記）

常に学級全体の様子を見ながら，自分の仕事や役割に責任をもって取り組もうとする和樹。「つかれるけれど」と，学級や友だちのために本意でないことでも一生懸命努力しようという姿が見られる。そしてその姿が信頼を集めており，和樹も友だちや周りに認められるということに「うれしい」と喜びを感じている。しかし，和樹自身が学級の中で，自分は友だちよりも頑張っているということを自覚している分，周りに対して命令的な口調になったり，自分の考えや方針に固執して周りの意見を受け入れないといった頑固さも見せたりしている。

> 今日は図工で作ったふねをプールにうかべました。ぼくはのってみてなんか本とうのふねにのってぼうけんしているみたいだなと思いました。ぼくは，船の色をオレンジと赤と青とみどりをつかったけれど，なかなかいい色になりました。色がたくさんあるときれいだなと思いました。りさこちゃんをのせてあげることにしました。りさこちゃんはうれしそうでした。もう一回やりたいなあ。　（８月７日　和樹の生活日記）

１学期の実践で巨大な発泡スチロールを使った船づくりを行った。和樹は自分のつくった作品で遊ぶことに対して「すごく楽しみ」と笑顔で語っており，自分がつくる船がどういう冒険にでる船なのかをイメージしながら作品づくりに取り組んでいた。

制作のなかで和樹は，全体の形を通して自分の想いを表現しようとするよりも，「ここに武器をつけるよ」「ここにレーダーがある」といった，部分々々の形やその意味づけにこだわっていた。そして，船全体の形からどんな印象をうけるかといったことや量感による表現には目が向いておらず，説明的な部品を少しつけただけの平面的な作品になっていた。

自作のスチロールシップで遊ぶ和樹

また，色においても「たくさんあるときれい」と色が多いことに美しさを感じてはいるが，色の組み合わせや使い方によって様々な表現ができるということには気づいていないようであった。

しかし，「とがった形は強い感じ」「赤い色は強い感じ」など，部分から感じられる表現には気づいていた。形や色に対してどんな表現が自分の想いに最も近いのかということにこだわりをもって深く追求していく姿勢を身に付けさせたいと考えた。

○和樹のとらえ
・学級や友だちのために努力し，認められることを通して喜びを感じることができる。
・色を混ぜ合わせて自分だけの色をつくったり，作品のなかの形に意味をもたせてつくったりすることで，自分らしさを表し，楽しんでつくろうとすることができる。しかし，部分的な造形にこだわり，作品全体の色や形のバランスを考えることが弱い。また，立体的な表現よりも平面的な　表現に向かってしまうことが多い。
・友だちのよさや努力に気づくことができる。しかし，友だちのよさをもとに自分の行動をふり返ったりすることはことあまりない。また，自分の考えややり方に固執し，周りの意見やアドバイスを受け入れようとしないときがある。

○和樹にかける願い
・仲間の表現や作品を見合うことを通して，その考え方，感じ方，工夫のよさに目を向け，それを認めたり自分のなかに受け入れたりしながら，さらに表現を拡げていこうとする姿勢を身につけてほしい。
・色の組み合わせや立体的な形に目を向けることで多様な表現方法に気づき，試行錯誤を重ねるなかで，自分の想いと色や形を工夫して表現することの楽しさを感じてほしい。

(2) 学級のとらえ・願い・教材の価値

１学期に行った単元「いざしゅっこう　スチロールシップでぼうけんのたびへ」では，子どもたちは材料である発泡スチロールを思い思いに加工し，つなぎあわせたり色をぬったりして自分だけの船づくりを楽しんでいた。そのなかでも，色による表現に対して関心が高い子どもが多く，色からどのような印象をうけるかということにも目を向けることができた。その一方で，立体表現に向かう意識の弱さがあり，発泡スチロールを重ね合わせて立体的な表し方をしている仲間の作品にはあまり関心を示そうとしなかった。そのため，作品が空間的な拡がりをもって表現されることが少なく，作品もダイナミックさに欠けた平面的なものが多かった。そんな子どもたちに，互いの表現のよさを感じ，想いと色や形のつながりを意識しながら，表現に対する見方や考え方，感じ方を拡げさせていくことはできないだろうかと願い，教材を模索した。

自分の想いを色の組み合わせや立体的な形の工夫によって表現し，作品をつくり上げていくことに喜びを感じられる教材はないだろうか。表現の幅を拡げるためには，加工が容易で立体への意識とつながりやすく，試行錯誤の過程がある素材がよい。紙粘土による作品づくりはどうだろうか。粘土で動物やお菓子などいろいろなものをつくることを普段から楽しんでいる子どもたちである。その粘土の可塑性を生かし，いろいろな形づくりに挑戦してみる。今までにつくらなかったような形に出会ったり，色や形からうける印象や感じ方をお互いの作品を通して比較したり考えたりすることによって，表現の楽しさを味わい，自分の作品をよりよいものにしたいという気持ちが生まれるだろう。また，普段の生活のなかで，夢を語ったり目標を立てたりと，様々な願いをもち，それを具現することに喜びを感じている子どもたちである。そこで，自分の願いをシンボル化する作品づくりをテーマに，顔の表情を生かして立体的につくったり，色の組み合わせを工夫したりしながら，作品に自分の願いを込め，想いを表現することのできる「紙粘土によるお面作り」が教材として浮かんできた。

○教材　「ひねってつくろう　元気をくれるジャンボお面」

○教材の価値
・自分の願いを込めるお面を題材にすることで，表情や顔のつくりを工夫することが，お面をから伝わる印象を強め，それが自分の願いの達成と結びつくと考え，立体感を意識しながらつくったり，色の組み合わせを考えたりして，作品に向かおうとする問題意識を高めることができる。
・平面的な表現に偏りがちだった子どもたちだからこそ，手を使って自由に形づくりができ，着色

をすることができる紙粘土を用いる。それによって，量感や表情を意識して立体的に表現することのおもしろさを感じさせ，表現に対する見方や考え方，感じ方を拡げさせていくことができる。
・まわりの友だちに目を向け，かかわり合いながら活動することのよさを感じている子どもたちだからこそ，加工が容易で，つくり直しができ，イメージと表現を結びつけやすい粘土を用いることで，互いの表現や工夫のよさに触れながら，自分の表現を高めていこうとすることができる。

○教材について
・お面の土台には縦５０㎝×横８０㎝の発泡スチロールを用いる。発泡スチロールは自分でよい大きさ・形に加工し，その上に紙粘土をつけていく。紙粘土は軽量でのびのよい「ふわふわ粘土」を用いる。

（3）第二次単元構想図（別紙）

提示用の教師作品

３　協同的な学びを支える教師の営み～和樹の追求から～

(1)問題意識をもって追求に向かうための出合わせを工夫する

紙粘土を使っていろいろな形づくりを楽しんだ子どもたち。子どもたちは今までの粘土による作品づくりにおいて，平面的な表現に偏ることが少なくなかった。例えば，粘土を板に押しつけ絵のように形を表したりする子どもがおり，粘土の可塑性や量感を生かして表現することに目を向けているとは言い難かった。子どもたちには，粘土を立体的に表すことによって対象の見方やとらえ方の幅を拡げたり，新しい形を発見していくなかで立体表現の可能性に気づかせたりしたいと考えた。そのためには，土台となるものの上に粘土を積み重ね，盛り上げていくような表し方が，立体表現への意識をより喚起できるのではないかと考えた。そこで，活動の始めに教師がつくった立体的なジャンボお面の作品を子どもたちに提示した。提示した作品は，顔の各部分を大きな凹凸で表してあり，色もカラフルにして，立体と色との両面で子どもにアピールできるように意図をもってつくったものである。提示の際，教師が「どのような想いをもってこのお面をつくったのか」ということについても子どもたちに語り，「このお面を見ると力をもらえるんだよ」と伝えた。事前の掲示物や資料その他から，お面の形状や祈祷的な要素に関心をもちはじめていた子どもたちは，その作品に出会わせることにより，粘土による立体表現と，色を豊かに使った作品づくりに興味を抱くであろうと考えた。そして，お面の表情を工夫しながら，想いをこめて作品を表すことに目を向け「自分の願いをかなえてくれるような，こういうお面がつくりたい」と，想いをもつに到るであろうと考えた。

ぼくは先生のお面はカラフルできれいだなと思いました。だから，みんなのねがいをかなえてくれるお面かなと思いました。そして，すごいなと思ったところは，目がもりあがっているところと，ふつうのところがあるので，よくできてるなと思いました。そして赤いところを見ると，みんなが元気になるような気がします。　（11月１日　和樹の学習記録）

和樹はお面を見て，色の豊かさと目の立体表現に関心をもった。そして，色の鮮やかさに対して「だから」と，表現とお面に込められた願いとの関係を感じ取ろうとしていた。そして，対話では，「足が速くなるような力をもらえるお面をつくりたい。」という想いをもつことができた。

(2)表現方法に対して対照的な考えをもっている子どもの意見をかかわらせ，個々の表現を深める

子どもたちは，思い思いに粘土をこね，土台の上に積み重ねながら顔をつくっていった。和樹も，粘土の鼻の部分をつき出すようにし，そのまわりにとげをつけていった。和樹は「鼻を鉛筆のようにとがらせる」ことによって，元気さが伝わるお面をつくろうと考えていた。和樹同様，何人かの子どもたちが粘土を垂直方向に伸ばしていくことにおもしろさを感じていた。そして，「鼻をとがらせる」ことで顔の異質感を出し，おもしろい雰囲気のある顔づくりを楽しんでいた。

じまんはすごくほっぺたがふくらんでいるところです。元気がつたわるような気がするからです。あと，鼻のところをえんぴつのように大きくとがってるようにしました。かみの毛をつけたら元気が出ると思います。
（１１月１７日　和樹の学習記録）
※ほっぺたをふくらませて元気を出そうとしたんだね。鼻も大きくしたね。かみの毛をどのようにしたら元気が伝わるかな。

追求途中の和樹のお面

和樹は１学期同様，部分々々の造形にこだわっていた。顔という一つのまとまりのなかで，個々の部分を独立したものとして追求していた。鼻を高くとがらせてはいるものの，顔の中の各部分のつながりや，粘土を盛り上げることによって生まれる表情や生命感のある表現などには気づいていないようであった。

元気が出るためにかわいくしました。そうするとえ顔にかんけいがあるからです。気づいたことは，立ててみたら鼻をいっぱいつき出さなくてもいいんじゃないかと思いました。－〈略〉－
（１２月３日　三奈の学習記録）
※お面をちがう方向から見たら，鼻をつき出さない方がいいと思ったんだね。三奈ちゃんは笑顔にすることが元気を出そうとしてるんだね。

ぼくがこれからしたいことは，目をもうちょっとでかくして，鼻をもっと高くして，とげとげみたいな粘土をつけたいです。目は横にもでっかくしたいです。口はもうちょっとふかくしたいです。
（１２月３日　恵斗の学習記録）

そんななか，鼻だけを大きくとがらせている友だちのお面に違和感を感じている三奈がいた。三奈は，お面の表情を人間らしくつくることで親しみをもたせ，それが自分自身を元気にすることにつながると考えていた。ゆえに，「つき出さなくてもいい」と，顔のなかで鼻だけを高く強調することに疑問を抱いていた。しかし，三奈のお面はと言うと，顔をきれいに見せたいという意識が強いために，表面がほとんど同じ高さになっており，平面的で迫力に欠けるものになっていた。粘土を使い，立体的な表現による表情の工夫においては，まだ弱さがあった。それに対し，一晃や恵斗は，鼻を高く盛り上げ，ボリュームをもたせることによさを感じていた。そして，平面的なお面は迫力に欠け面白みがないと考えていた。そこで，かかわり合いにおいて，鼻を大きくとがらせたりデフォルメしたりすることで元気さを出そうとしている子どもの考えと，顔らしさを出しバランスよく見せることが大切だという三奈の考えを対照的に位置づけることによって，互いの表現を自分の作品に照らし合わせて考え，想いに到るための自分の表現の足りなさを立体表現の視点で見直すためのきっかけにしようと考えた。

－〈略〉－
T　３５　えっと，ちがった方面での自分の気づきってありますか。一晃君。
一晃　３６　友だちのを見て思ったんだけど，友だちのを見て思ったんだけど，明星君のお面の鼻は火山が噴火したみたいでおもしろいと思った。
T　３７　明星君ね。うん。明星君のはこんな感じですね。（作品の写真を提示する）ちょ

		っと写真だとわかりにくいかな。ちょっと明星君見せてあげてくれる。どうですか。どんな感じになっていますか。おもしろい。おもしろい。どうですか三奈ちゃん。
三奈	３８	私は，こうやって立てて気づいたんだけど，鼻をみんな突き出してるんだけど，私はそんな，大きく突き出さなくてもいいんじゃないかと思います。
Ｔ	３９	突き出さなくてもいい。うん。あなたは突き出さないように作ったということだね。
三奈	４０	えっと，私は，知音ちゃんみたいなのはいいんだけど，みんな鼻がとがってて，えっと，みんな鼻を大きくすると元気が出るって思ってるかもしれないけど，鼻はみんな出すと，うーんと，あんまり，鼻はいっぱい出すと元気が出ると，みんな思ってるけど，こうやって鼻を出して先をとがらせてると，私はなんか，こわく感じちゃう。
Ｔ	４１	うん。
三奈	４２	なんか元気が出ると思っても，優しく元気出してねって言う感じが出なくって，嫌がらせみたいに元気出してと言ってるみたいに私は思っちゃうから，私はとがらせなくても，こうやっていっぱい出さなくてもいいんじゃないかと思いました。
Ｔ	４３	はい。これに対して。とがらせたら元気になるってみんなやってるみたいだけど，それは違うんじゃないかってことを三奈ちゃんが言ってくれましたが。三奈ちゃんはブーンて（お面を鼻を指しながら）鼻をとがらせているわけではないですね。
Ｃｎ	４４	似てる人もいた。
Ｔ	４５	似てる人もいた？うん。「自分，ちょっと三奈ちゃんに似てるよ」という人というか，同じような感じで作っている人いますか？琴美ちゃん？
Ｃｎ	４６	早詠も。
Ｔ	４７	それから，あとはいませんか。同じ？あなたも？逆に，自分はとがらせたよという子はいますか？
Ｃｎ	４８	鼻？鼻？
大昇	４９	ぜんぜんとがらせとらん。
Ｔ	５０	三奈ちゃんは誰のがとがっているなと感じましたか？
三奈	５１	一晃君。一晃君，それから賢士郎君。
Ｔ	５２	どうでしょうか。今，鼻をとがらせた方がいいよっていう意見と，いや，鼻をとがらせなくてもいいんじゃないかという意見がでましたが。ねっ，比べてみてどんな感じがしますか。早詠ちゃん。
早詠	５３	私は，明星君たちみたいに鼻をとがらせてもおもしろいと思うんだけど，あんまり大きくしちゃうと，男の子は周弥君とか賢士郎君とか，恵斗君とか一晃君とか，みんななんか鼻の背が高かったり，昇希君は丸いんだけど，男の子はみんなとがったりしている子が多いから，もっと鼻とかはいろんな工夫をして，もっと鼻だけは自分のだけだっていうふうにつくったほうがいいと思いました。
Ｔ	５４	あなたの言ってるのは，みんな似たような鼻が多いって言うことかな？で，とがらせたお面を見るとあなたはどんな感じがしますか。
早詠	５５	なんか，とがらせるっていうか，鼻が高い子が多いから，和樹君とかもっと鼻を知音ちゃんぐらいにちょっと短くするだけで変わると思うから，私はあんまりみんな一緒とか，一緒の鼻とかはやめた方がいい。
Ｔ	５６	なるほど。鼻をとがらせている子たちから意見はありますか。恵斗君。
恵斗	５７	早詠ちゃんに質問なんだけど，鼻をとがらせたほうが，ちょっと盛り上がってたりするから，あんまり平面上で同じ高さの，花菜ちゃんとか早詠ちゃんとかよりも，だいぶとんがってとがらせて高くして平面上じゃなくて上の方に伸びてる方がいいと思います。早詠ちゃんはどう思いますか。
Ｔ	５８	恵斗くんちょっと待ってね。盛り上げたら，あなたはどういう感じになると思いますか。
恵斗	５９	盛り上げると，ちょっとでも元気がでるかなあと思います。
Ｔ	６０	盛り上げたら元気な感じがすると言うこと。
恵斗	６１	うん。
早詠	６２	だけど，こっちゃんとか麻友ちゃんとか三奈ちゃんとかにしても，目とか，目

		とか口とかがこっちゃんたちは違うから，鼻だけでなくて目とか口とかもやればいいと思うんだけど。恵斗君はどう思いますか。
恵斗	６３	それだったら大昇くんのお面みたいにいろんなところを盛り上げればいいと思います。
T	６４	大昇君のお面？これちょっと見えるかな。(写真を提示)
早詠	６５	だけど，私が思うのは，低かったり，盛り上げてたり，なんか盛り上げてたり，この肌とかが盛り上がってたり，小さくなってたりするのが私はおもしろいと思うんだけど，恵斗君はどう思いますか？
T	６６	ちょっと待ってて。早詠ちゃんはこっちの顔とかの方が，あなたは元気が伝わると思ってるんだよね。恵斗君はこういうふうに平面的なっていうか，平らな感じがするような顔だと，元気が伝わってこないから，鼻をとがらせたり，例えば大昇君のように，鼻をふくらませてやったらどうだと思っているんだよね。みんなのは，自分のお面をみてどう思いますか？はい，三奈ちゃん。
三奈	６７	さっき恵斗君は，大昇君みたいなやつがいいって言ったんだけど，私は鼻がつき出してても，大きくなってとがらせてるのが，なんかこわいっていうだけで，知音ちゃんとか大昇君とかはつき出してるけど，なんか，とがらせてないから，私は知音ちゃんとか大昇くんとかはいいんだけど，一晃くんとかは一馬君とかはこわい感じがする。
		－〈略〉－　　（１２月８日　追求を見直すかかわり合い①授業記録）

かかわり合いでは，鼻の形をデフォルメさせることによさを感じている子どもの発言が続いた。そして，一晃の発言でをよさが語られた明星の作品を取り上げ，「どんな感じになっていますか」と，子どもたちに問いかけることで，デフォルメさせるのではなく，顔らしく見えることによさを感じている子どもの意見を引きだそうと考えた。そして三奈を指名した。「思ってるかも」「思ってるけど」（三奈４０）からは，単に鼻を大きくすることが元気につながる表現ではないと自分の考えを語っている。この三奈の考えは，安易に鼻を大きくするだけで満足してしまい，それが「元気さを出したい」という想いにどうつながるのかを考えていない子どもに対して，「なぜ自分は鼻を高くする必要があったのか」と，自分の表現を見直すためのきっかけとなるであろうと考えた。そして，三奈のように平面的なお面に取り組んできた子どもにとっては，一晃や恵斗らの意見を聴くことが，粘土を盛り上げることのよさに目を向け，平面的な表現から立体的な表現への可能性を追求していくきっかけになるのではないかと考えた。

三奈を指名した後，その考えに続けたいという早詠を指名した。早詠も三奈同様，平面的な表現をしていた子どもである。鼻を伸ばすと「こわく感じる」と言っていた三奈とは少し違い，早詠は鼻をとがらせることに集中してしまうと，ひとりひとりのよさが出ないため，安易に鼻だけを伸ばしていくのはよくないという立場であった。早詠５３で鼻についての意見を述べた後，さらに早詠の考えを明確にするとともに，想いと形とのつながりを他の子どもたちにも考えさせるため，「どんな感じが」（Ｔ５４）と投げかけた。しかし，早詠はそれには答えず，過剰なデフォルメをやめて全体のバランスをとることが大切だという内容を訴えた。ここで教師は，想いとのつながりをもとにかかわり合いをもたせるために，再度「どんな感じが」と投げかけるべきであったが，全体のバランスをとるという視点を他の子どもたちにもたせたいと思い，Ｔ５６で対照的な立場をとっている恵斗を指名した。恵斗は，平面的だとお面としての迫力に欠け，見るものに元気さが伝わらないという考えである。恵斗５７，５９では，お面を横から見たときの「同じ高さ」という視点から，「同じ高さ」のお面だと平面的で元気な感じがしないと主張した。ここで，「みんな鼻を大きくすると元気が出るって思ってる」（三奈４０）の意見につなげると，想いと形とのつながりについて再度考える場になっていたかもしれない。しかし，恵斗と早詠が互いに形についての考えを出し合うことが重要だと考え，そのまま述べさせることにした。早詠は鼻を「ちょっと短く」（早詠５５）と表現を抑えることを考えていたが，恵斗の発言を受けて「鼻だけでな

く目とか口とかも」（早詠６２）と，立体的にすることは肯定したうえで，顔の他の部分も鼻同様に立体的にしてバランスをとるという考えを述べた。恵斗もそれに対し，「それだったら」と，早詠の考えを受け入れ，「いろんなところを盛り上げれば」（恵斗６３）と鼻以外の部分も盛り上げて全体のバランスをとりながら立体的にすることを受け入れていった。そして，その後「盛り上がってたり，小さくなってたりするのが私はおもしろい」（早詠６５）と，今まで平面的な表現で追求していた早詠が，立体的な変化があることによさがあるという新しい視点での発言を述べた。これは恵斗６３の意見を受け，大昇の作品（写真）を見たことで，盛り上がっていて全体が同じ高さだと結局見た目の変化に乏しいので，顔全体の凹凸の変化を工夫しながらつくるのがよいという考えに到ったものと思われる。かかわり合いが恵斗と早詠の二人だけの意見交換になってしまいそうだったので，Ｔ６６で「ちょっと待ってて」と，一旦流れを止め，この話し合いが何について行われているのかを確認させた。そして，「自分のお面をみてどう思いますか」（Ｔ６６）と，全体に返すことで，一人一人にもう一度自分の表現をふり返らせ，自分の想いに近づけるためにはどういうところが足りないのかを考えさせるきっかけを与えようとした。

ぼくはしゅうや君の意見をきいて思ったんだけど，ねん土に絵のぐをねりこめば，かっこいい青色とかつくれるから，ねりこんでみようと思いました。ぺらぺらみたいなうすいお面より，しょうきくんやゆうだいくんやぼくのお面のようにあついほうがいいと思いました。なぜかというと，あつさが元気が出ると思うからです。
（１２月８日　追求を見直すかかわり合い①後の恵斗の学習記録）

恵斗は，かかわり合いを終えた後も，鼻をかざるということにこだわりをもっていた。恵斗が形を「とがらせる」ということによさを感じ，それが自分にとって心地よく「元気になれる」と考えていたためであると思われる。授業記録では「あつさが元気が出る」と，それまでの「鼻を高くすること」で元気につなげようとするのではなく，全体のボリュームをもたせることが元気につながると考えを変えてきた。かかわり合い後は，鼻以外の部分（ほおや口）に粘土を継ぎ足し，あごからも角状のものを出していた。

制作当初の恵斗の作品

追求を見直すかかわり合い①前の恵斗の作品

かかわり合い①後の恵斗の作品

わたしが友だちのお面を見て「やりたい！」と思ったことは，顔の色がこい色になってしまったので，琴美ちゃんみたいなはだ色で少し白い色にしたいなあと思いました。これからそれをやっていきたいです。　（１２月８日　追求を見直すかかわり合い①後の早詠の学習記録）

早詠は，全体のきれいさを大切にしていたためか，かかわり合いの後も大胆な立体表現をすることには向かわず，色による元気さの表現に向かっていった。かかわり合いにおける発言が，相手の表現に対する発言で終わってしまって，自分の表現をふり返るまでには到らなかったように思われる。平面的な作品の子どもにとっては，「かわいくつくりたい」という意識が根強くあり，立体表現においてダイナミックになりきれなかった面もあるのではないかと思われる。

私は三奈ちゃんの言ったように鼻が小さいほうがいいと思ってたけど，かんがえてみたら，どんがってもいいと思いました。どうしてかというと，鼻から元気を出そうという子もいたかもしれ

ないからです。だから鼻をとんがらして，くらいいろを使わなければいいと思いました。
（１２月８日　追求を見直すかかわり合い①後の琴美の学習記録）

しかし，三奈や早詠同様にきれいさにこだわり，平面的な追求をしていた琴美が「とんがってもいい」と，立体表現に対する理解を示し，考えを拡げていた。早詠は，それを自分の表現に生かすかというところまでには到っていなかったが，琴美は鼻やほおの周りを盛り上げを意識し，一度着色したお面の上に再度，粘土を継ぎ足しつくり直していた。立体表現への意見を聴き合うことで，平面的であった自分の表現を見直そうという動きが見られたのだと思われる。

かかわり合い後の早詠の作品

かかわり合い前の琴美の作品

かかわり合い後の作品

ぼくは，小さいお面の子は小さいものをつけて，大きいお面はどこも大きいものをつけたほうがいいと思います。なぜかというと，小さいものには小さいものがにあうと思ったからです。けんしろう君のはカラフルでいいなと思いました。
（１２月８日　追求を見直すかかわり合い①後の和樹の学習記録）

和樹は学習記録に，お面につける粘土の部分はその顔の大きさに合わせて決めるとよいという考えを書いた。しかし，その根拠は，「にあうと思った」という，ややあいまいなもので，想いとの結びつきについては言及していなかった。全体のバランスを考えてつくるとよいという意識は見られ，色についても関心を示している。

(3) 表現を想いに近づけるために，多様な考えのなかから新たな視点をもって追求に向かう姿を引き出す

－〈略〉－　もう一つは鼻のとんがっているところを二つふやしました。なんでかというと，麻友ちゃんがアドバイスをくれたからです。そして，目も色をかえてみました。そうしたら，前よりも元気がもらえるような気がしてきました。　（１２月１０日　和樹の学習記録）

和樹は友だちのアドバイスをうけて，自分の作品を見直そうとしていた。それまでは自負心が強いがゆえに，まわりの意見やアドバイスを受け入れることの少なかった和樹である。これを機に，部分的で小さな表現に偏っていた和樹に，友だちの考えを聴くことを通して，作品全体のバランスを考えた立体表現に向かうための新たな視点をもって追求させたいと考えた。また，それ以外の子どもたちにとっても，表現についての考えを聴き合うことで，自分の作品をふり返り，様々な考え方に触れることが自分の表現を拡げることにつながるということを実感させたいと考え，和樹の作品を中心として，その表現について気づきやアドバイスを出し合う場をもった。このかかわり合いでは，和樹の作品が想いに迫るために，表現の足りなさを全体で考えることで，各々が自分の作品について想いと照らし合わせ，表現を見直せるようにと考えていた。

－〈略〉－
彩　　２８　　私は友だちのを見て思ったことなんだけど，和樹君の目が小さいからもっと大きくしたらどうかなって思うんだけど，和樹君はどうですか。

Ｃｎ	２９	ちょっと小さい。
Ｔ	３０	ちょっといい。目が小さいとどんな感じがしますか。
彩	３１	元気がないような感じ。
Ｔ	３２	元気がないような感じがする。小さいと元気がないと。これについてどう思いますか。
和樹	３３	彩ちゃんはそういう風に思ってると思うけど，ぼくも本当は大きくしたかったんだけど，大きくすると，それは元気が出るとは思うんだけど，大きいと，なんか，ぼくは大きすぎてもなんか，このお面には似合わないと思ったから，ぼくはこのお面の小さいままでいいと，ぼくは思います。
		－〈略〉－

（１２月１３日　追求を見直すかかわり合い②授業記録）

和樹は，この日のかかわり合いでは，始め，友だちからの気づきやアドバイスに対し，なかなか受容的な態度を見せなかった。和樹のお面の目が小さく目立たないために元気さを感じないのではというアドバイスをした彩に対し，「大きくすると，それは元気が出る」と理解はしているものの，「小さいままでいい」と，表現について見直そうという姿勢を見せなかった。そこで，色をカラフルにしたり，形を立体的にすることによさを感じ，実際に自分の作品にその方法を取り入れている子どもを指名し，その子どもの作品を提示しながら具体的に示すことで，自分の作品と照らし合わせながら表現を見つめ直せるよう試みた。

		－〈略〉－
昇希	６７	和樹君のお面のことなんだけど，和樹君は鼻より上の方が，肌色とかばっかりだから，もっと色を増やした方がいいと思います。その方が，元気が出ると思います。
Ｔ	６８	みんなはどうかな。和樹君は色が少ないからこのへんに色を増やしたんだけど，昇希君は「このへんはいらないの？」と。
和樹	６９	ぼくは，このままでいいと思っています。なんでかというとぼくは，このままの色合いの方が，ぼくは，いいと思っているから，このままでいいと，ぼくはいいと思います。
昇希	７０	何でこのままでいいと思うんですか？
和樹	７１	ぼくはこのままで元気が出ると思うからです。
Ｔ	７２	じゃあさ，さっき早詠ちゃんが言ってくれたこの辺は色がついているけど，この辺は肌色のままだよね。下は色を変えたよね。それはあなたがさっき「色をたくさん使わないとつまらないから」と言ったんだけど，この辺は色をかえなくてもつまらなくないの？
和樹	７３	ぼくは，下半分の色合いが多くしたかったから，下半分は色を変えて上はそのままにしました。
昇希	７４	でも，もう少し色を増やした方が，元気が出るかんじがすると思うんだけどどうですか。
和樹	７５	じゃあ昇希君はどんな色をぬった方がいいと思っていますか。
昇希	７６	それは，自分が元気だと思う色をぬった方がいいと思います。
和樹	７７	でも，ぼくは散々その色をまぜたりして，思って，開発中なんだけど，でもなかなか見つからないので，もう元気の出る色はないと思うんだけど，昇希君はどう思いますか。
昇希	７８	そうしたら，友だちとかに「この色をまぜたらどんな色になるの」とか，みんなにまぜたことを聞いてみればいいと思います。
		－〈略〉－
梨咲子	９２	私は上の所は下の所みたいに周りだけ色をつけて，まん中の所は肌色を残してもいいと思います。
Ｔ	９３	ここの肌色を和樹君は大切にしているから，ここの肌色は残して，周りの方に色をつけたらどうかということかな。そう？
和樹	９４	ぼくは，今そうしてて，ここのへんとか，まだ髪の毛の辺とかはやってないん

だけど，ここの辺とかはやってみようと思う。
－〈略〉－
（１２月１３日　追求を見直すかかわり合い②授業記録）

和樹は子どもたちや教師の問いかけに対し「このままで元気が出る」「もう元気の出る色はない」と表現を見直すことに消極的であった。さらに，カラフルさによさを感じているにもかかわらず，「下半分の色合いが多くしたかった」と，部分的な彩色についてこだわり，全体をどう表すかについては追求の姿勢が見られなかった。昇希７４で「色を増やした方が」と色の表現の工夫について述べたとき，和樹７５は「どんな色を」と関心を示しているので，昇希７８以降に「元気が出そうな色が見つかれば和樹君もぬってみたいのかな」と，追求を見直そうとする意識を支える声かけをするべきであった。自負心の強い和樹である。自分では変える必要があると感じてはいても，アドバイスの仕方によっては反発を招いてしまい，素直に友だちの意見を聴けないという判断をし，自分の作品につい実際に色を塗り直した結果，前よりも元気が出るお面になったと実感している梨咲子を指名した。「自分も試してみた」という意見なら和樹も受け入れやすいと考えたからである。梨咲子が９２で「上の所は下の所みたいに周りだけ色をつけて，まん中の所は肌色を残してもいいと思う」とアドバイスを述べると，和樹は「やってみようと思う」と述べ，再度追求に取り組もうとする姿勢を見せた。

見直し前の和樹のお面

見直し後の和樹のお面

和樹はその後，目の周りを濃くぬり，小さい目を際立たせることに取り組んだ。「目が小さい」と感じていながらも，大きくすることに抵抗をもっていた和樹が，色をぬり直すことで目の存在感を高めようとしたのであった。１２月１３日の学習記録「ほんとうに目立つ」からは，作品が変わったことへの驚きと喜びが感じられる。

今日，ぼくは目のまわりに色をぬってみました。みんなが目が目立つよといったからです。やってみたらほんとうに目立つようになりました。　（１２月１３日　和樹の学習記録）
※みんなの意見をさんこうにして色をぬったら，目がくっきりして顔の感じがすごくかわったね。

ぼくのお面のじまんは，上のほうに小さいもようをつけました。たくさんの色の丸をつけたら，元気が出るような気がしてきました。そして，色と色との間にもかもめのようなもようをつけました。そうしたら，ますますおもしろくなりました。　（１２月１４日　和樹の学習記録）
※下だけでなく上の方にも色をぬったら元気が出てきたんだね。

また翌日の追求では，顔の上半分の着色にも挑戦していた。学習記録には，色をたくさん増やしたことを「じまん」だと述べ，「元気が出るような気がしてきた」と語っている。前日に友だちのアドバイスを受け入れ，それがうまくいったという体験が，この日の前向きな追求につながっていると思われた。自分とは違った考えや感じ方，表現方法に触れ，そのよさを認めることで自分の表現を拡げていく和樹の姿があった。

自分の作品を見直す和樹

(4) 自分の活動をふり返り，追求の価値を実感させる場をもつ

完成したお面の作品を並べ，お互いの作品を見合うなかで，自分の活動をふり返る場をもった。この

際，これまでの制作過程の作品の写真と，今目の前にある作品とを見比べることによって，自分がどのような考えをもち，または考えを変えて作品づくりに取り組んできたかをふり返られるようにした。それによって，自分の想いを色や形で表すためにはどんな方法が最善であったのかを再認識し，色や形による表現と想いとのつながりについて，強く意識できるようになるであろうと考えたからである。そして，作品や写真を見合ったあと，活動や作品についての考えを述べる場をもった。ここで，考えを聴き合い，仲間の同じような考えに触れたり，自分の活動や工夫のよさを認められることで，立体的に形を表現することのよさや，想いを色や形で表現することの楽しさに気づき，自分の追求の価値について実感させたいと考えた。

		―〈略〉―
昇希	６５	僕は最初は角をここにつけたり，鼻を大きくするとかは考えてなかったんだけど，最初，角は耳の方につけようとしてて，途中で，鼻も大きくすることにして，角も上の，上の方につけることにした。
Ｔ	６６	先生ね，知りたいのは，なんで途中で気が変わったかと言うこと。
昇希	６７	角を，目の上にすると，なんか，角とか鼻とかから，元気が出てくる気がして，なんだか，気が変わった。
		―〈略〉―

（１２月１６日　核心に迫るかかわり合い）

作品についての考えを述べる際，教師はお面の形や色に対する根拠を子どもに語らせ，想いと表現とのつながりを再度全体に意識させようと考えていた。そこで，制作の段階で試行錯誤をし，元気さにこだわりながら色や形を追求しようとしていた昇希を指名した。昇希６５の，大きく形を変えようとしたという発言に対し，「なんで」と，問い返した。昇希は，鼻を大きくしたり，角の位置を変えることで，より「元気が出てくる」と，お面全体から伝わる元気さを出そうとしていたと語り，形と想いとのつながりを意識しながら追求してきたことを述べることができた。

		―〈略〉―
和樹	１０２	ぼくは拓弥くんのお面を見て思ったんだけど，杏樹ちゃんみたいに，たくさん飾りをつけて，もっと，飾りをたくさんつけたら，このお面，今のお面より，かなり，元気になると思うんだけど，拓弥くんはどうですか。
拓弥	１０３	飾りをつけたら，このお面には似合わないと思います。
Ｃ（桜佑）	１０４	うーん。確かに。
和樹	１０５	じゃあ，髪の毛をつけてもにあわないんですか。ぼくは髪の毛をつけた方がいいと思います。
Ｔ	１０６	例えば，誰のような髪の毛をつけたらいいと思う？
和樹	１０７	ぼくは，彩ちゃんのように毛糸でつけるとか，琴美ちゃんのように，普通，もう茶色い色で，やるとか，僕みたいに粘土で，細く，つけるとか。
		―〈略〉―

（１２月１６日　核心に迫るかかわり合い）

和樹は，自分の作品について，試行錯誤の段階でよいものができたと語ったあと，仲間のお面について発言をした。その時は，拓弥のお面の表現のよさが話題になっていた。拓弥と和樹は全体の形状としては近いものがあるが色の使い方や表情の工夫の点で違っている点も多い。色やかざりにこだわった和樹と，表情のおもしろさにこだわった拓弥がお互いのよさを感じ取れるのではないかと考え，和樹を指名した。しかし，和樹は他の友だちの表現のよさを挙げた後，拓弥の表現に足りないと感じているところを挙げた。「髪の毛をつけた方が」と述べた際，教師が「どうして」と問い返そうと考えたが，そうすると「元気を感じる」「感じない」の水掛け論になると判断し，「例えば，誰のような」と具体的な例を出させて，拓弥

表情を工夫した拓弥の作品

本人に考えさせようとした。拓弥自身は顔をシンプルに表現することによさを感じており，「だれにでもじまんができるかんぺきなおめん」（１２月１６日拓弥のふり返り作文より）と，自信をもった記述をしている。和樹が拓弥のお面のよさを述べ，認めることはここではできなかった。仲間の作品で注目したところを挙げ，それが想いとどうつながっているのかを聴き合うことで，相手のよさを感じ取ることにつなげる支援をすべきであったと考える。

> ぼくがお面作りでむずかしかったところは，かみの毛を作ることです。どこがむずかしかったのかというと，かさねあわせるところが一番むずかしかったとおもっています。そしてぼくがお面作りで気づいたことは，かみの毛やかざりの小さいところは小さい部品，目やはなや口の大きいところは，中ぐらい～大きい部品をつけたほうがいいと気がつきました。そして，一番大切なことは，やはり，元気と楽しさが出ることがし（※ひ）つようだなぁーとおもっています。いいお面づくりの毎日でした。　（１２月１６日　和樹のふりかえり作文）

和樹はふり返り作文でお面の髪の毛についてのこだわりを思わせる記述をしていた。和樹は追求の際，難しさを感じながらも，髪をひも状にして縦横を交錯させ，重ね合わせてつくろうとしていた。これは，造形遊びの時，和樹がひも状の粘土を使って様々な形をつくろうとし，その工夫を認められた経験が活動につながっていたのかもしれない。そして，お面の表現のなかで，小さい部分と大きい部分に変化をもたせて顔をあらわすことがよさにつながると考えるようになった。これは，粘土による表現を試行錯誤するなかで，特徴的なものの量感を大きくする重要性に気づき，立体表現に向けて考えを新たにしたのだと思われる。また，「一番大切なことは，やはり」と，お面に想いの表現がなされているかということを意識した記述からは，自分のやり方にこだわり，周りに影響を受けることを嫌った和樹が，想いを伝えることという共通のテーマをもとにかかわり合うことで，仲間の考えを受けとめ，色のバランスや効果を考えたり，量感を意識して自分の表現を見直し，それが想いを込めた納得のいく作品づくりにつながったと実感する姿が感じられた。

このように，活動を通した仲間とのかかわり合いのなかで，様々なものの見方や考え方，感じ方を受けとめ，自らの表現を拡げ，想いを色や形で豊かに表現することの喜びを感じていく子どもの姿を今後も願っている。